日本語とペルシア語の呼称に関する対照研究

LD102001　　セペフリバディ　アザム

【要 旨】

本研究は、会話において話し手が聞き手を指す際に、どのような表現を用いるかということは、両者の関係を築く上で、重要なファクターの一つである。人を指すことばである「人称表現」は、一般にそれぞれの言語の特徴に応じた特性を有し、例えば、会話が成立する場面や話し手と聞き手の人間関係によって使い分けられる傾向がある。特に、異文化接触場面のコミュニケーションでは、話し手と聞き手は互いに呼び方、呼ばれ方で戸惑いを感じたり、違和感を持つ場合があり、それは時には誤解の原因となりうる。円滑な人間関係を構築するために、相手や場面によって人称表現を適切に使い分けることが鍵となると言える。

本研究は、言語体系と言語使用の接点の問題を分析対象とする社会言語学の手法を採用する。すなわち、本稿は、対称詞のバリエーションの選択に関する記述・分析を通して、日本語とペルシア語の言語体系と言語使用の相互関係を明らかにするための基礎的研究として位置づけることが可能である。以下は各章の概要である。

【第 1 章】

第 1 章では、両言語の呼称研究に大きな影響を及ぼしたいくつかの西欧語の呼称研究を概観し、その後で、両言語の呼称研究における本研究の位置付けについて述べる。

西欧語には、日本語のように社会言語学的に見て多様で複雑な呼称表現はほとんど存在しないと言われている。ただし、恐らく、ほとんどの西欧語では、話し手に対する配慮を表現するために、呼称および単数二人称代名詞と複数二人称代名詞、いわゆる「T&V」の選択が行われる。聞き手と話し手の間に、年齢や社会的地位による上下関係や力関係が存在する場合には、複数二人称代名詞、いわゆる「V」を使用し、聞き手と仲間意識を示したい場合には、単数二人称代名詞「T」を使用する。

西欧語における人称代名詞を対象とした代表的な研究として、Brown and Gilman（1960）と

Brown and Ford（1964）が挙げられる。これらの研究では、個々の言語事象がテーマとされ、主として power と solidarity と呼ばれる話し手と聞き手の力関係と仲間意識の観点から分析が行われている。

ここでは、ペルシア語の人称代名詞の体系を考える上で重要な鍵の一つである人称代名詞の相互・非相互使用と呼称の関係を明確化するために、欧米の人称代名詞研究の先駆けとなった上記二論文の概要を示しておく。両研究により、呼称と人称代名詞等の表現の使用パターンの変化の過程がその背景にある話し手と聞き手の力関係と仲間意識という社会的関係との関連性に、インド・ヨーロッパ語族の言語共同体の均質性が確認された。続けて、ヨーロッパ諸語の呼称研究である Brown and Gilman（1960）とアメリカ英語の呼称表現の研究である Brown and Ford（1964）の研究を個別に概観する。

【第 2 章】

本研究を実施するにあたり、日本語母語話者とペルシア語母語話者、それぞれ 250 人程度を対象とするアンケート調査を実施した。アンケート調査の研究対象者は、日本語を母語とする東京在住の日本人とペルシア語を母語とするテヘラン在住のイラン人である。第 4 章以降で、アンケート調査の結果を統計化し、比較・対照する。

表 1 : 調査対象者の性差および人数

性差	小学 5 年	中学校 2 年	高校 2 年	大学 2 年	社会人 2 年目	合計
男 女	25 名 25 名	25 名 25 名	25 名 25 名	25 名 25 名	25 名 25 名	125 名 125 名
合計	50 名	50 名	50 名	50 名	50 名	250 名

本調査では、日本語とペルシア語の親族間の上下関係に基づく呼称の使い分けを検討するため、話し手（調査対象者）を基準として、上位世代と同世代に属す目上・目下関係にある親族を設定し、それぞれの親族に対してどのように呼びかけるか、調査対象者に尋ねた。回答は自由記入式であった。なぜなら、できるだけ多様なバリエーションを収集して類型化し、その類型から両言語における呼称の使い分けの傾向およびその特徴を探ることを意図したためである。なお、質問紙では、それぞれの親族と対面して対話するという状況のみを設定した。

本研究では、便宜上、調査対象者と同世代の親族と上位世代の親族に分けて、調査結果を記述する。本研究における同世代の親族とは、調査対象者の実の兄弟・姉妹であり、上位世代の親族とは、祖父母、父母である。両言語でのアンケート調査の各質問に対する回答データを処理、統計化し、グラフにまとめる。

【第 3 章】

互いに呼び合うときにどのような呼称を選択するかは、両者の間にどのような関係が成立しているか表示する目安となる。

日本語では、ペルシア語に比べ、自分を指したり、相手に呼びかけたりする場合に、人称代名詞、職業・役割名、親族名称、実名、役職名、愛称などの多種多様な選択肢から成る呼称を、自分と相手の社会的関係、会話の場面、性差などに基づいて選択する必要がある。呼称は、その選択により、相手に親近感を感じさせる場合もあるが、戸惑いをもたらす場合もある。即ち、異文化コミュニケーションでは、互いに異なる習慣を背景に持っているため、呼び方、呼ばれ方に対する戸惑いによる摩擦が生じやすい。

ペルシア語は、インド・ヨーロッパ語族の一派であるインド・イラン系語派に属す言語である。本来、インド・ヨーロッパ語族のほとんどの言語には、日本語のような多様な人称表現は存在せず、管見の限りでは、日本語で発表されたペルシア語の人称表現に関する専門研究は存在しない。そのため、両言語の呼称用法を体系的に知る上で、必要なデータは不十分であり、本研究では、日本とイランの言語社会では、どのような状況下で、どのような表現で、自分自身を指したり、相手に呼びかけるか、明らかにするために、社会言語学的観点から日本語とペルシア語を母語とする話者を対象とした調査と分析を行った。

【第 4 章】【第 5 章】

第 4 章、第 5 章では、日本語とペルシア語の親族内での上下関係による呼称の使い分けを検討するため、話し手を基準として、年齢・世代および序列において目上と目下の関係におかれる親族を想定し、それぞれの親族に対する対称詞の使い分けを検討した。その結果、次のような類似点と相違点が観察された。まず、両言語では、年齢の上下が目上と目下を決める基準となる。つまり、両言語では、目上の人に対しては親族呼称で、目下の人に対しては実名が最も多用されている点で類似している。

実名の使用については、両言語とも目下に対して用いるのが一般的であるが、日本語の場合、目上に対してもその使用率が高い。また、日本語では実名以外にあだ名を使う使用率が高い。しかし、ペルシア語では、あだ名は宗教的に使用が好ましくはないものである。また、ペルシア語では上世代に対して実名が使用されるケースは見られなかったが、兄姉に対しては一般的に実名が使われる。

実名の使用では、両言語とも目下に対して用いるのが一般的であるが、日本語の場合、目上に対してもその使用率が少なくない。日本語における目上の人、とりわけ兄・姉に対する結果をまとめると、呼びかけ・会話の際には「お兄ちゃん」、「お姉ちゃん」という伝統的な親族呼称が少ない。一方、「兄貴」「兄ちゃん、姉ちゃん」「にっちゃん」あるいは「あだ名＋ちゃん・くん」「名前＋ちゃん・くん」という答えもあった。また、兄・姉に対して名前を用いる例もある。これは年上に対して、名前で呼びかけることはできないという鈴木孝夫（1973）の原則とは異なる結果である。この理由は昔は兄姉と妹弟の人数が多かったため、兄姉を「お兄ちゃん・お姉ちゃん」と敬語の「お」をつけて呼ぶのが一般的であった。しかし、最近は少子化の影響で兄姉の人数が少なくなったため、上下関係より仲間同士の意識が強くなったと考えられる。

一方、イランでは兄弟、姉妹間に上下関係なく、呼びかけのときに最も多く使われているのは名前だが、兄と姉に対して「dadash(兄／弟),abajī(姉／妹)」という呼び方もある。このような呼び方は弟と妹に対して、また兄と姉に対しても使用されているが、兄と姉から使う方が少ない。またペルシア語では会話の中では、兄弟（男女）の会話において代名詞のみを用いるのが普通であるが、学歴が高くかつ年齢差が大きい兄弟は、より尊敬の意味がこめられた、「shomā（あなた）」という敬称を用いる場合もある。その他の場合は親しみを込めた、「to（君／お前）」という呼称が使われる。会話の中で人称表現を使わない日本語、人称表現のみを使うペルシア語はこの点が対照的である。

【第 6 章】

第 6 章では、日本とイランの自称詞の使用実態を調査し、その結果から両言語の自称詞の使い分けとその特徴に焦点を当てて考察を行った。

日本語では、男性の使う自称詞は、成長に伴って、女子よりも早く変化する。また、父母、祖父母に対して年代により異なるが、「兄姉、弟妹」に対して使う自称詞はほとんど変わらない。「おれ」という表現は「ぼく」と同様に主に男性が用い、相手が同輩以下であるときに使用す

ること1が影響していると考えられる。また、小学校 5 年生は家族の全員に対し、「こちら」「こっち」を多く使用するもの、中学校以上では使用しないことが調査により判明した。

女性の場合、小学生は家族全員に対して自称詞として「名前」か「あだ名」を最も多く使用しているが、中学生以上の年代では、聞き手の年齢により自称詞の使い方が変わる。「うち」の定着も確認された。また、年代が上がると共に使用する自称詞も変わる。昨今、日本語の大きな特徴である「男性語」、「女性語」が中性化する傾向を辿るという説があるものの2、未だこれらの使い分け、特に性別による人称代名詞の使い分けは健在であることが実証された。

また、男女共に、話し手が使用する自称詞の種類は、話し手の性別や年齢といった、話し手のアイデンティティの変容に影響を受けることが確認された。さらに話し手が成人に近づくにつれ、自称詞のバリエーションが減り、男性「ぼく」、女性「わたし」に収斂する傾向が見られる。

ペルシア語の自称表現に関しては、一般的な自称詞は、代名詞「man（わたし）」と再帰代名詞「khodam（わたし自身）」であり、そのバリエーションは少ない。そこで、ペルシア語では、家族内で使用する自称詞は「man（わたし）」「khodam（わたし自身）」という自称詞ですべて事足りるので、使い方も場面により、ほとんど変わらない。家族内での一人称代名詞の使い方をみると、自分を称するとき、一般的に、家族におけるどのような立場の人に向かっても相手が誰であろうと「man（わたし）」か「khodam（わたし自身）」を使用する。ペルシア語では、家族だけではなく、学校内、目上の者に対しても、一人称代名詞の使い方は目上・目下の区別がない。また、年齢が上がっても自分自身のことを表す表現が変わらない。

【第 7 章】

上記の結論を社会言語学的な観点から整理し直すと、日本語では、以下の 7 点にまとめられる。

① 日本語では、目上、或いは一人前と見なした場合、親族名称、「～さん」が選択され、目下、或いは対等と見なした場合、名前やあだ名の呼び捨てや「～ちゃん」、会話では人称代名詞が選択されやすい。

---

[1] 金丸芙美（1993）「人称代名詞・呼称」『日本語学』5-12 、明治書院、75−77 頁。
[2] 小松寿雄（1998） 「キミとボクー江戸東京語における対使用を中心にー」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』 汲古書院、49 頁。

② 日本語では、父母・祖父母に対する呼称は親族呼称が多い。一方、かつては、兄・姉にも親族呼称が使われていたが、そちらは廃れつつある。そのことは、父母・祖父母は目上と見なされる一方、きょうだいが対等な関係になりつつあることを示唆している。

③ 日本語では、呼称のバリエーションが豊富であり、個人差が大きい。

④ 日本語では、呼格的用法と代名詞的用法の間に明確な境界線がなく、会話において人称代名詞を使用しないことが多い。

⑤ 日本語では、男女共に、年代が上がると共に、使用する呼称が変わる。呼びかける側、呼びかけられる側では、「～さん」づけが増え、互いに距離を取るようになる一方、自称詞は、男子では「こっち／こちら」や「おれ」を経て「ぼく」や「わたし」、女子では名前やあだ名、「うち」を経て「あたし」や「わたし」という社会性の強い自称詞へと移行する。

⑥ 日本語では、男子のほうが女子よりも呼称の社会化が先行する一方、女子のほうが聞き手に対して丁寧で親しみのある呼称を選択する傾向がある。

⑦ 日本語では、呼称の選択にアニメやゲームなどのポップ・カルチャーが影響を与えることがある。

上記の結論を社会言語学的な観点から整理し直すと、ペルシア語では、以下の 6 点にまとめられる。

① ペルシア語では、家庭内において、年齢の上下に関係なく、会話において人称代名詞のみを使用する。

② ペルシア語では、呼称の選択に対し、「性差」よりも「上下関係」の与える影響が大きい。

③ ペルシア語では、同等の場合、あだ名は使わず、名前で呼ぶのが一般的である。

④ ペルシア語では、呼格的用法と代名詞的用法の間には、明確な境界線がある。代名詞的用法では、人称代名詞が用いられる。

⑤ ペルシア語では、男女共に、話し手が使用する自称詞の種類はバリエーションが少なく、選択の余地はない。また、年代が上がっても、使用する自称詞は殆ど変わらない。

⑥ ペルシア語では、宗教的規範が呼称に影響を与える傾向がある。